
魔法少女リリカルなのはGOD or LVF

六甲水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはGOD or LIVELY

【Zコード】

N4065Y

【作者名】

六甲水

【あらすじ】

マテリアル事件から三ヶ月の月日が立ち、季節も冬から春へと変わった頃、とある次元の世界で時の守護者である姉妹の一人がとある事件を起こす。

その影響で別世界の未来では一人の少女が次元の穴に巻き込まれ、スターは一人の行方を追い、さらにその先の未来ではディバイダー所持者の少年とリアクトプラグの少女もまた次元の穴に飲み込まれ、その兄である男とパートナーの少女が助けに向かう。そしてさらなる別世界では機動六課の別部隊が次元の穴の調査を行うために次元

の穴へと入り込む。

とあるなのはViViD&ForceとLOST MAGICの住人たちが同じ世界でめぐり合い、そこで何かが起きる

LVF01 次元の向こうから.....(前書き)

というわけで、ゲームの話を元にした物語の始まりです。最初はそれぞれの主人公たちが次元の穴へ入る話です。

LVF01 次元の向こうから

マテリアル事件から三ヶ月後、見事解決したなのはたち。今は穏やかな日々を歩んでいるのだが……

とある次元世界

「じゃあね、アミタ。例の件は私がしつかり成就してくるから、」

ピンクでロングの少女がそう言いながら、次元の壁を破り、姿を消すのであった。残された赤髪の少女は……

アミタと呼ばれる少女は妹であるキリエを追つて、次元の果てへと向かうのであった。

一方 別次元の別の時間軸の世界

「それじゃあ、行きますよ。アインハルトさん。」

「はい」

ヴィヴィオとアインハルトは今日も一緒に練習試合を行なっていた。そんな一人をベンチに座りながら見つめるスター。彼女は闇の欠片の一人であり、人間になりたいという願いを叶えたものである。

「二人とも、無茶はしないでください。」

そんな穏やかな日々を過ごしていた三人だが、そんな三人の前に突然巨大な穴が開いた。

「！」、これは……」

スターは咄嗟に空へと飛んで穴に飲み込まれずに済むのだが、ヴィヴィオとアインハルトの二人は一瞬の出来事だったせいか、その穴に飲み込まれてしまった。

「この穴は……次元の穴？早く一人を追わないと……おかしな次元世界に飛ばされてしまう。」

スターはバリアジャケットを身に纏い、次元の穴へと入っていくのであった。

そしてこの時間でも……

「おいおい、俺は確か、トーマとリリイと一緒に訓練中だったはずなんだけどな……」

ソーガはそう言いながら目の前に広がる次元の穴を見つめた。トーマとリリイの二人は突然現れたその空間に飲み込まれてしまったのだ。

「くそ、さつさと助けに行くか。ギル、セットアップ」

ソーガはバリアジャケットを装着すると、隣にいた少女に話しかけた。

「イリス、何があるか分からぬから、ユニゾンするぞ」

「うん、ユニゾン・イン」

イリスとユニゾンし、次元の穴へと入るソーガたち

そして、この次元でも……

「あらあら、面白そうな空間が出来ていてるじゃない。」

「巨大な魔力の反応を追ってきてみれば……」

「…………次元の穴が出来ている。」

フレ、エクス、サクヤの三人は巨大な魔力を感じて、グラナガン

の立入禁止地域に来ていた。そんな三人の前に次元の穴が開いていたのだった。

「さて、機動六課の一員として、これの原因でも調べてみましょう」「ボスがそういうのであれば……」

「はあ、結局こうなるのか。しょうがない。行くか」

三人は次元の穴へと入り込むのであった。

原因である少女たち、そして知らずの内に巻き込まれた各次元に住む者たち。これは決して混ざわることがない世界の住人たちの物語である。

LVF01 次元の向こうから.....(後書き)

次回はソーガ編から始まります。

ソーガ① 幼き頃のなのはとの出来事（前編）

今回はソーガが幼い頃のなのはとの出来事です。

ソーガ① 幼き頃のなのはとの出会い

次元の穴を通りて、トーマとリリイの二人を救出へと向かったソーガとイリスの二人。二人は次元の穴の先へとたどり着くと、そこは……

「何か普通の街に出たな。」

「そうだね。てっきりおかしな異次元空間とかに出るかと思つたけど……」

一人の目の前には広がる景色は、ミッドチルダと違つて巨大な都市とかではなく、普通の街であった。

「それにしても、何だかここ見覚えがあるんだよな。」

「そうなの?」

「ああ、何かなのはさん辺りに『真を見せてもらひたような』……

ソーガがそんなことを思つていると、遠く離れた場所から誰かが境界を開く感じがした。

「『』にも魔導師がいるのか?」

「そつみみたい。『』からそつ遠く離れてないから行つてみよつよ。」

「ああ、」

「人は結界が展開された場所、街からそう離れていない丘へと向かうのであった。」

丘へとたどり着いた一人は目の前に広がる結界を見つめた。

「さて、とりあえず、この結界を開いた人にでも話を聞いてみるか」

「話つて？」

「ここはどこなのかだよ。俺たちはおかしな場所に来てるかもしけないだから……」

「そうだよね。それにまだ日が登り始めたばかりなのに……結界なんて開いて……なにしてるんだらうね？」

「とりあえず、行つてみようぜー！」

ソーガとイリスの二人は謎の結界へと入り込むのであった。

結界の中に入った二人は、しばらく辺りを歩いていると、結界の中心らしき場所へとたどり着いた。そして、そこには幼い少女と小さな小動物が空き缶を使って魔力弾の練習を行なっていた。その少女が使う魔力弾の色に……ソーガとイリスは見覚えがあった。

「あれは……」

「もしかして……」

「ちょっと話しかけてみようか」

ソーガは少女のことが気になり、話しかけるために少女の元へと向かった。イリスもソーガの後ろをついていく。

「あの、君たち、ちょっとといい？」

「はい？」

「君たちはどうして、結界に入り込んでいるんだ？」

話しかけられ、振り向いた少女と結界の中を自由に歩いているソーガたちに驚く小動物。だが、ソーガたちはその少女に少し見覚えがあつた。それは……

「なのはさん？」

「えっ、確かに、わたし、なのはですけど……」

「イリス、これはどうことだ？ 何でなのはさんが小さくなつて

るんだ？」

「それ以前に、ここのなのはさんの魔力の感じ、私達が知ってるなのはさんと違う感じがするよ。」

「それってつまり、俺たちは……」

「うん、別世界のなのはさんたちの世界に来てたりして……」

ソーガとイリスの二人が現状について話している中、なのはは一人が何の話をしているか訳がわからなかつた。

「ねえ、ユーノ君。ここの二人、何の話してるの？」

「僕にも分からない。けれど、別世界がどうとか……」

「それじゃあ、次元漂流者かな？それだつたらリンティさんに連絡を……」

「そうだね。僕が連絡して置くから、なのはは彼らに話を聞いておいてくれないか？」

「うん、分かった。」

なのはがソーガ達の元へ近づき、保護することを伝えると……

「保護？まあ、俺らは別に次元漂流者じゃないんだけど……」

「でも、少し情報が必要かもしませんよ。今私達がいるこの時間はどれくらいのことなのかな？」

「そういえばそうだよな。ジュエルシード事件の時か闇の書事件の時か分からないし……」

「ジュエルシード、闇の書。どうしてあなた達が知ってるんですか？」

なのはがソーガたちの会話を聞いて、知つてゐる単語が出てきたため、二人のことを警戒しました。するとソーガは……

「う～ん、信じられないと思つけど、俺とイリスは別世界の遙か未来から来たんだ。」

「別世界？ はるか未来？」

「とりあえず、詳しい話をしたんで、リンクティさんに会わせてください」

ソーガとイリスはそれとなくリンクティの名前を出すと、なのはとコーノは警戒しながら、二人をハラオン家に案内するのであった。

なのはと出会いうソーガたちを、上空で見つめていた男が一人いた。

「ヤツの魔力。あれは……ロストマジックか。ボスのために貰い受けようか。」

ソーガ01 幼き頃のなのほとの出来事（後編）

次回はV.i.V.i.D編です。

ヴィヴィオ01 一人の王とスター vs シュテル・ザ・デストラクター（前書き）

今回はヴィヴィオとアインハルトの二人がフェイトと出会います。
そしてスター vs シュテル・ザ・デストラクターの戦いが始まります。

ヴィヴィオ01 一人の王とスター・バシュテル・ザ・デストラクター

ソーガたちがなのはと一緒にハラオン家へ向かっている頃、ハラオン家のマンションの屋上では……突然大きな音が鳴り響き、音の原因の場所には……一人の王がいた。

「いたたー、ここがどう? アインハルトさん大丈夫?」

「ええ、こきなり空へ落とされて、多少の怪我を覚悟していましたが、どうやら無傷です。」

アインハルトが自分の体を見て言つと、ヴィヴィオはどうして自分たちがこんなところにいるか考えた。

「私たち、一緒に大会の練習してたんだよね。」

「ええ、スターさんがそれを見ながら読書していましたが、確か、いきなり巨大な穴が開いて……」

「うん、それで私たちその穴にはいちゃつたんだよね。それで気がついたらこのマンションの屋上の真上に出てきて……」

「とりあえず、ここがどこなのか知りましょ。そうしなければ動け……」

アインハルトが何かを言いかけた瞬間、突然構えて屋上の扉を睨んだ。

「ど、どうしたの? アインハルトさん?」

「誰かが来ます。ちょっと魔力も感じます。」

「そうなのー? だつたら……ってあれ? そういうえばこの景色何だか見覚えが……」

ヴィヴィオがそんなことを呟いていると、屋上の扉が開きアインハルトは身構えた。扉を開けて入ってきたのは……ヴィヴィオとそろ変わらない歳の金髪の少女と紅い色の犬だった。

「せっつきの大きな音、ここに何か落ちたみたいだけ……」

「フェイト。何か女の子が一人いるよ。」

金髪の少女と犬が何かを話していると、アインハルトはさうに身構えた。

(あの犬。しゃべっている。もしかすると使い魔? なら、隣の少女がその主……何だかヴィヴィオさんのお母様のフェイトさんに似てる気が……)

ふつとアインハルトがヴィヴィオを見ると、ヴィヴィオは困惑していた。

「あれ? 何でフェイトママが小さく? あれ?」

(やはり、ヴィヴィオさんのお母様。でも、)

アインハルトが色々と考えだしたが、答えがまとまらず、少女に話しかけた。

「すみません。私たちは突然ここに落とされたのですが、あなたは魔導師の方ですか？」

「はい、時空管理局嘱託魔導師のフェイト・T・ハラオンです。こつちは使い魔のアルフです。」

「よろしくな

（どうやら、本人みたいですが…………ですがこれは一体…………）

AINHARDTがまた考えだと、VIVIOLAがあることを言い出した。

「あのもしかしてここ、海鳴市ですか？」

「はい、そうだけど…………えっと、とりあえず詳しい話を聞きたいたらまずは名前を……」

FIGHTに名前を聞かれて、VIVIOLAは少し焦った。高町と名乗つていいのか…………もしかして今自分たちがいる世界は過去の世界で、自分の名前を名乗つたら未来に何か影響があるかもしないと…………すると、AINHARDTが気をきかせた。

「私はAINHARDT・ストラトス。こっちが妹のVIVIOLA・ストラトスです。」

「あ、はい。姉妹でこいつして、」

AINHARDTはヴィヴィオと自分が姉妹ということにすればなんと

かなると思つた。

「うん、よひしけ。ヴィヴィオ。AINHARD。とりあえず我が家で詳しく述べ聞きたいから……あれ?なのはから連絡だ」

フロイトの口からなのなの名前を聞いて、この世界がビリビリ世界か確信したアインハルトとヴィヴィオ

「ビリビリ、私たちは過去に来てゐるみたいですね」

「うん、でも、何だかおかしいんだよね。フロイトママの名前はフロイト・テスラロッサ。ハラオンはクロノさんの名前なんだけど…」

…

「これはまだ確証がないのですが、私たちは別世界のなのはさんたちがいる世界にいるのです、」

「えつと、それって、なんて言つんだっけ?」

ヴィヴィオが何かを思つて出でつたと考へだしてこゝると、アインハルトが答えた。

「並行世界。同じ世界だけど、少し違つてこゝーとですね。」

「うん、じゃあ、こゝー…」

「ええ、平行世界に私たちは迷い込んだのじょ」

海鳴市の砂浜でスターは一人立っていた。

「次元の穴に迷い込んだ先が、海鳴市ですか。ですが、ちょっと違うみたいですね。そうですよね。『私』」

スターが空を見つめると、そこにはスターそっくりの少女がいた。

「ええ、あなたがいた世界とは違う世界です。とりあえず、私は今はシユテル・ザ・デストラクターと呼ばれています。貴方は?」

「スターで結構です。」

「そうですか、ここで出会ったのも運命です。一戦お相手願います。」

「

「ええ、こうしてお互い出合つてしまつた以上、こうして戦うしかないみたいですね。」

「はい、世界には同じ自分は……」

「「一人で十分です」」

二人の少女が同時に動き、同時に魔砲を放つた。二人の少女、同じ自分との戦いがこうして始まつた。

ヴィヴィオ01 一人の王とスター・バシリュテル・ザ・デストラクター（後書き）

次回はトーマ編です。スター・バシリュテル・ザ・デストラクターは
ヴィヴィオ編02かソーガ編02で行います。

トーマ01 八神家の住人（前書き）

今回はトーマ編です。トーマ編でプロローグ的なものは終わりになります。

トーマ① 八神家の住人

それぞれの出会いを果たしている頃、八神家ではやてが車椅子に座りながらソファーに座るトーマとリリイの二人にお茶を出していた。

「ほんま、驚いたよ。まさかいきなり庭の上から落ちてくるなんて

……」

「すみません。」迷惑を……

(ねえ、トーマ。)の入つて……)

リリイがトーマに念話を送ると、トーマも送り返した。

(うん、八神司令だね。もしかしたら俺たち過去に来たんじゃ……)

(そうかもしれないね。何だかこの街、ちょっと次元のゆらぎがあるらしい気がするし……)

二人がそんな事を話していると、はやてが不思議そうな顔をしていた。

「さつきから二人共じつとしとるけど、どうしたん?」

「あ、いえ、ちょっとと考え事を……」

「あの、八神し……八神さん」

「別にさん付けせーへんでもええよ。それに八神さんじゃなくってはやでええし、それで、どうしたん?」

リリィに微笑むはやで、リリィは少し申し訳なもつてあることを聞いた。

「えつと、はやてちゃん……車椅子に座つてゐるナビ、足怪我したの?」

(リリィ思い切つたこと聞くな……)

トーマがリリィの質問にやうと思つて、はやては太ももを指すながら答えた。

「うんとな、二人共魔法については知つどるみたいやし、話してもええよね。実は私の足、ちょっとした魔道書の影響で生まれた時から歩けなかつたんやけど、三ヶ月前に友達が協力してくれて、その影響が無くなつたんや。あと少ししたら直ぐに歩けるようになるようになるから、心配せんでもええよ。」

「そうですか。何か色々と聞いてすみません」

「別にええよ」

はやてがやんわりと笑顔で言つのであった。するとはやては電話の方まで行き、電話をかけた。

「とりあえず、二人のことは管理局の知り合いに相談してみるわ。」

「何か色々とお世話をなつてすみません。」

はやでが知り合いに電話をしている中、トーマとリリーはのんびりと紅茶を飲んで過ごしていた。だが、

「あれ？突然切れてもうた。どうしたんやろ？何か爆発した音も聞こえたし……トーマさん、リリーさん。ちょっとつけ、リングディさんのお家に行ってるわ。」

「あっ、それでしたら、俺らも」

「うそ、爆発音とかも気になるし、」

「うそして、トーマ、リリー、はやでの三人はハラオン家に向かうのであったが……」

はやての案内でハラオン家があるマンショウとたどり着いた二人だが、そこでは小さな結界が張られていた。

「じれつて、」

「エリかの魔導師に襲われるとるん？」

「ねえ、トーマ。少しだけだけど、ソーガトイリスの魔力を感じるよ。」

「兄さんたちの…じゃあ、もしかして、兄さんたちが誰かに襲われてるって言つー」と…

「とつあえず行つてみようよ。」

「うそ、」

トーマは何も無い空間から一冊の本と銀色の銃剣を取り出し、リリイの服もバリアジャケットに変わり、リリイはトーマにゴーリンをした。それを見てはやは…

「トーマさん、魔導師やつたんや。それにリリイさんもリインフォ

ースと回じゴーバンデバイスやつたん?

「うへん、ちよつと違つかな。」

『詳しく述べて聞くから、後でじよ。今はあそい』

「分かった。うちも行く。セットアップ!」

はやでもバリアジャケットに着替え、三人は結界の発生源である屋上へと向かうと、そこには……黒いコートを着た男とソーガが戦っている姿があつたのだった。

トーマ01 八神家の住人（後書き）

次回はソーガとヴィヴィオが合流し、戦いが始まります。

LVF02 運命をたどるための元（前書き）

今回の話でなのはGOの序盤に入る感じになります。

LVF02 運命をたどるため

トーマたちが少し来る前、ソーガとイリス。そして先に来ていたヴィヴィオとアインハルトが合流した。

「ヴィヴィオ。お前たちも来てたのか」

「ソーガくん。エリは一体どうこいつなの? とか、ソーガくん少し成長してるし」

「それにそちらにいる彼女のことを気になります。」

アインハルトがイリスのことを見つめて言つて、イリスは……

「私はイリス・ラインです。ソーガくんの幼なじみです」

イリスが自己紹介をすると、ヴィヴィオとアインハルトは……

「幼なじみって……」

「いつの間に見つけたんですか?」

「何か話が噛み合わないけど……」

四人がそんな事を話していると、フェイトが……

「あの、とりあえず畠さんのお話しあるみたいですけど……」

「あ、」めぐ。「フェイトさん。」

「いえ、本当はリンクティ母さんかクロノと話をしてもうつたほうがいいと思つたんだけど、一人とも出張に言つてるみたいだから……」

「……」

「まあ、俺たちも帰りたいと思つてゐるけど、まずは状況を確認しないといけないし……ん?」

ソーガが言いかけた瞬間、何かの気配を感じ取つた。

(魔力反応? それも……) うちに向かつて攻撃仕掛けてくれる! ! !)

「みんな! 伏せろ! 」

ソーガがそう叫んだ瞬間、突然ハラオン家のベランダが爆発した。ソーガは咄嗟に白羊宮を開き、爆発を防いだ。

「いきなり攻撃してくるとか……誰だ! ! ! 」

ソーガが攻撃してきたほうに叫ぶと、そこには黒いコートを身に纏い、手には黒い刀を持つた男がいた。

「ロストマジックの一つ、黄道十一宮発見。悪いがお前の持つ魔法狩らせてもらうぞ! 」

「悪いけど、この魔法は俺の大切な魔法なんだよ。ギル! セットアッブ! 」

ソーガはバリアジャケットを起動させ、襲撃者に向かつていった。

「ゼーガ！」

『黒鴉発動！』

男は刀を鞘に収め、ソーガが接近してきた瞬間、抜刀と同時にソーガは爆発した。

「ぐうう」

「この程度か。」

男が刀を振りかざそうとした瞬間、ピンクのバインドが男を縛り上げた。男が振り向くとそこには

「じめんなさい。でも、見ず知らずの子を襲うのは良くないと思つ。」

バリアジャケットを着たなのは、フェイト、さらには大人モードのヴィヴィオとアインハルト、白い羽を生やしたイリスがいた。さらには……

「兄さん！」

「なのはちゃん。フェイトちゃん。」

トーマとゴーデン状態のはやても駆けつけてきた。

「トーマ、それにリリイも…………それに幼い頃のはやはし……はやてさんも」

「あれ？ 何でうちの」と……」

「とまあえず、話は後にしたほうがいいと思つ。兄さん、この黒い人は……」

「分からぬ。何か俺の十一宮魔法を狙つてきたみたいだけど……」

…

「さすがにこの数を一人で相手するのはキツイか。」

男がそう呟いた。なのはは男に近づくと……

「とまあえず、捕縛して話を聞かせてもらいます。」

「あら、悪いけど、そりはさせないわ。」

どこからとも無く声が聞こえた瞬間、白い光弾がなのはを吹き飛ばした。

「さやあー。」

「なのは」

ユーノがなのはの体を受け止める、攻撃が来た方を見るといこには白い着物を着た女性と鎌をもつた男がいた。

「はじめまして、過去の人々。そして平行世界の住人さん。」

まだ幼さが残っている少女が丁寧にお辞儀をした。

「悪いですが、私達はまだ捕まるわけには行きません。それに手に入れなきやいけない力もあることですので……」

少女はソーガを見つめて言つと、白い小瓶を取り出した。

「そこの十一宮使いさん。私に勝てると思わないほうがいいですよ。なんせ、私は…………最強のロストマジックを所持してますので……」

少女が小瓶から白い液体を取り出すと液体は銀色の時計に変わった。イリスはその時計を見た瞬間驚いた。

「あれは、まさか……ロストマジック『時の波紋』どうしてあの人ガ……」

「あら、貴方…………そう、まさかこんな所で会うなんてね…………」

少女は少し悲しそうな表情をしたが、少女は直ぐに真剣な表情を浮かべた。

「次元魔法『タイムコード』あるべき運命をたどるために…………離れになつてもらいます」

すると少女の上に黒い穴が開き、ヴィヴィオ、アインハルト、トーマ、リリィ、ソーガ、イリスの六人は黒い空間に吸い込まれた。

「そして、記憶も改変させでもらいます。貴方たちはまだ出会つていないと……」

少女がなのはたちに白い魔力球を当て、姿を消した。

一方その頃、

紅い閃光と紫の閃光が何度もぶつかり合いをしていた。

「力を身につけたはずですが……まさか貴方もまた成長をしているのですね」

「ええ、そうですね。」

スターとシユテルが互いの力について話していると、そこに水色の髪の少女がやってきた。

「おーい、シユテルん―――つて、シユテルんが一人いる――」

「レビイ。貴方も復活したようですね。」

「えつ、何？シユテルん、もしかして分身できるようになったの？」

「いえ、違います。こちらは別世界の私です。」

「こちらでは初めましてになりますね。私はスター。」

「別世界？よく分からぬけど、僕はレビイ・よろしくね。スター」

レビイがスターと握手を交わしていくと、シユテルが

「ところで、我らが王は？」

「そうそう、復活しそうな場所分かつてきたり、迎えに行こう」

「分かりました。スター、貴女との決着は後です。私達にはやるべきことが……」

「そうですか。ですが、あなた方やるべき事、私も手伝わせてください。もしかすれば、元の世界に帰れる方法が王から教えてもらえるはずです。」

「分かりました。では、行きましょう」

スターはシユテルとレヴィと一緒に王が復活する場所へと向かうのであった。

LVF02 運命をたどるため (後書き)

次回はGODの話になります。アミタヒヨーノの戦いから始まります。

ソーガ〇2 運命の守護者（前書き）

今回からGOの話に入ります。今回はソーガとアリタとの出会いをやります。

ソーガ02 運命の守護者

謎の集団が襲撃してきてから数日が経つたある日のこと、なのはとユーノは化石発掘に来ていた。

（そろそろ切りもいいし、なのはに声をかけて休憩しようかな？それについても、この間のアレは一体……）

ユーノは数日前に起きたハラオン家謎の爆発事件について思い出していた。

何があったかも分からず、何故かハラオン家のベランダが破壊され、さらには部屋の中が荒らされていたりした。さらには何故かみんなしてバリアジャケットを着て外に出ていたという奇妙な事件のことを……

（何故かその時の記憶がまったく思い出せない。まるで何かに記憶を消されたみたいだ……）

ユーノは一旦その時のことと思い出すのをやめ、なのはに連絡を入れようとした。すると……

「あの、そこの人。すみません。」

突然、後ろから声をかけられ、振り向くとそこには赤色の髪に何故か銃を向けている少女がいた。

「あ、あの、」

「あの、今困ってるんです。助けてください。治癒術使える方がA
C93系の抗ウイルス薬が必要なんです！わりと緊急に、今すぐ！」

「わ、わかりましたけど、とりあえずその向けている銃を降ろしてください。」

「本当にお願ひします。急がないと大変なこと……」

「僕のほうが大変なことになりそつ…………ん？この反応は……」

ユーノは上空から奇妙な反応を感じ、上を向くと空から一人の少年が落ちてきた。

「えっ、ちゅうど、」

「お願ひします。早く…………って、」

落ちてきた少年は少女の方へと落ちていき、そのままぶつかってしまい。地上へと落ちていった。

「あやああああああああ！」

少年と少女はそのまま森の方へと落ちて行くのであった。それを見たユーノは……

「一体何が…………それにさつき落ちた男の人って…………」

『ユーノ君？さつき妙な感じがしたんだけど、何かあったの？』

するとなのはから念話通信が来た。とりあえずユーノはなのはにさ

つかの状況を話すのであつた。

そして森に落ちた少年と少女は……

「いたた、いつたい何が……」

少女が起き上がり、辺りを見渡すとそこには青髪の少年が倒れていた。

「この子、やつを落すてきた…………もしかして私達がこっちに来たのが原因で…………と、そんなことより早くキリエを……つう

少女がその場から離れようとしたが、突然体がふらついた。

「キリエからもられた毒が…………でもこんなもの、気合と根性で……

……

「いや、無理しないほうがいいと思つた」

突然声をかけられた少女は辺りを見渡すと、さつき倒れていた少年が起き上がっていた。

「あ、ごめんなさい。大丈夫ですか」

「大丈夫だけど……とこうか、ここは……それにさつきの黒服のやつは……」

少年が何か呟いていた。すると少女は……

「あの、私、急ぐんで、事情説明はさつき会った子にお願いして……つう」

少女がその場から離れようとしたが、体が思つように動かず歩けなかつた。

「何かさつき毒にやられたとか聞いたけど……大丈夫か?」

「だ、大丈夫。それよりも君、治癒術か抗体薬とか持つてない?」

「うーん、どんな毒かよく分からぬいけど……多少楽になれるかもしれない魔法なら使えるけど……」

「くつ」

「星より来たれ!天蠍宮のスコル」

少年が呪文を唱え、少年の左拳に拳具が装着された。すると少年は少女の首に針を刺した。

「彼の者の体を蝕む毒よ。毒の猛威を止めよー。」

すると少女の体が白い光に包まれるとさっきまで動けずにいた少女が普通に立てるようになつていた。

「す、じ。これって、解毒魔法？それともぜんぜん違う感じがする。それに古の力を感じるし……もしかして、十二宮魔法？」

「よく知ってるな。俺は十一宮魔法の使い手、ソーガ・ベルリッツ。お前は？」

「エルトリアのギアーズ。アミティエ・フローリアン…よろしくソーガ。つて、こんな所で道草食つてる場合じゃない。ごめんね。わたし、妹を探してるから……じゃあ」

アミタは一瞬でその場から消えていった。残されたソーガはどうと……

「一体何なんだ？あいつ…………でか、ここ海鳴市じゃないし、ん？何で俺、さつきまで海鳴市にいたつて思つてたんだ？何か記憶混乱してきた。えっと、確かトーマとリリイが行方不明になつて……そんでもつて、俺が探してる内に変な空間に飲み込まれて……気がついたらここにいたんだよな。ん？黒服の男つて誰だ？あれ？」

『ねえ、マスター？どうしたの？』

ソーガが考えまくつて居ると勝手に出てきた宝瓶宮のベルが話しかけてきた。

「あ、ベルか。何か記憶が混乱して……ベルは何かしらないか?」

『何かつて、私もなんだか白い魔力球を喰らつて記憶が少し消えてるんだけど……』

「魔力球?」

『うん、何かいきなり出てきて、私達を攻撃してきたんだけど……といつか、イリスは?』

「イリスは……つて、はぐれた? ユニゾンしてたのに?』

『ユニゾンしてたっけ?』

もひつ何がなんだか分からなくなつてきたソーガ。すると……

「あの、すみません。そこの人ちよつといいですか?」

空から声が聞こえ、ソーガは上を見上げるとそこには白い魔導服を来た少女とロープ纏つた少年がいた。

「あれって……」

「えつと、ちよつと聞きたいことがあるんですが、空から落ちてきたつて聞いたんだけど、とりあえず名前聞いていいかな?」

「んと、ソーガ・ベルリツ。何というか次元渡航者とかじゃない

んだけど、気がついたらここで氣絶してたみたいなんだ。」

『あ、私は宝瓶宮のベルです。』

何故かベルも自己紹介をすると、白い魔導服を着た少女が、

「宝瓶宮？あ、名前いい忘れてました。私、高町なのはです。こつ
ちは」

「ユーノ・スクライアです。えっと、ソーガさん。色々と聞きたい
ことがあるから一緒に来てもらつていいかな？」

「別にいいんですけど……（それにしても、この二人つて、なのはさ
んとユーノ司書長だよな。何でこんなに幼いんだ？まさかこいつて
過去の世界つて言つことじやないよな）」

とうあえずソーガはなのはとユーノの二人について行くのであった。

ソーガ〇二 運命の守護者（後書き）

次回はキリエ登場と王の復活をやります。

ソーガ03 王様復活（前書き）

今回はキリエの登場とティアーチエの復活です。そこにソーガはどう関わってくるかお楽しみに

ソーガ③ 王様復活

なのはとユーノに保護されたソーガはとうとう、海鳴市の海岸沿いに一緒にいた。

「えつと、話をまとめるべく君は未来から来たって言つたとなのかい？」

ユーノがソーガから聞いた話をまとめて話した。するとソーガは……

「まあ、そんな感じかな。あんまり信じられないと思つたけど……」

「確かに未来から来たって言われて信じることできないけど……」

「どうしようかユーノ君？ クロノくんに相談したほうがいいよね。」

「でも、クロノは出張中だし……とりあえずソーガさんには暫くの間僕達と一緒に来てもらつていいかな？」

ユーノの提案にソーガは頷くとなほがソーガにあることを聞いた。

「ねえ、未来から来てって言つと、未来の私やユーノ君のことも知つてるんだよね。」

「まあ、知つてるけど、あんまり教えちゃいけない気がするんだよ。こうして接触してる時点でマズイけど、未来での出来事を教えたら偉いことになりそうだしそうだし……特になのはさんの場合は……」

ソーガはなのはが近い未来大怪我することやヴィヴィオと出会いつい

とに関して言おうとしたが、それを止め、違うことを聞いた。

「あのや、なのはさん。」

「ん? 何?」

「上条当麻つていう人知ってる?」

「上条当麻? ごめんなさい。知らないけど……私と何か関わりあるの?」

「いや、ちょっと聞いてみただけだから……(上条さんを知らないところとやつぱりここは俺がいた世界の過去とはちょっと違う世界つて言つことなのかな? それじゃあ、フロイトさんの母親も……)」

ソーガは少し考え、とりあえず一人と一緒に歩き出たつとした瞬間、

『ソーガ、海の方から空間振動、さらには魔力収束を感じ。なにか来ます!』

「空間振動!? それに魔力収束って……何が来るんだよ。」

ソーガはなのはとユーノの二人にそのことを伝えようとするとい、人もまたそれを感じ取っていた。

「ユーノくん! これって、」

「「」の魔力。まさかマテリアル達が……」

(マテリアルつて、スターが人になる前になつてたつていう闇の欠

片みたいなもんか？それに何かすゞい胸騒ぎしてゐる。）

ソーガはギルダーツを起動させ、なのはとユーノの一人から離れた。

「じめん。ちょっと気になる」とがあるから、行かせてもらひます。
後で戻つてくるのでじ心配なく…」

「じ心配なくつて、海の方は危険だから……」

「ソーガくん。戻ってきて」

「じめん。本当に…」

ソーガは全速力で反応を感じた場所へと向かうのであつた。なのは
とユーノもソーガの後を追うことには……

ソーガは反応があつた場所へとたどり着くと、そこ周辺が奇妙な魔
力が渦巻いていた。

「何か本当に嫌な感じがしてきた。」

『「Jの魔力、スターをまにそっくりですね。』

「あいつも元々マテリアルだからな。他の二人と似た感じがするのもしようがないよ。つと、どうやら遅かつたみたいだな。」

ソーガは反応があつた場所を見ると、そこには幼いはやてとリインフォース。あとさつき会つたアミタと似た武装を持った少女がいた。そして、辺りを黒い光が包み込み、その光の中心には……

「ふふふ……はは……ふつはははははは……黒天に座す闇統べる王！復ツ！活ツ……！」

マテリアルDが自分の復活を凄く喜びながら登場していた。それを見たソーガは……

「あいつって、もつと王様の貫録なかつたつけ？なんかバカキャラぽっく……」

ソーガははうつぶやき、とりあえず近くに行くのであった。

「小鴉にポンコツ融合騎、それに桃色、それに後ろでこっちに近づいてきてる星使いか」

ソーガは気が付けれないので、近づこうとしたが、あっさりバレてしまつた。

「あら、いつの間に来たのかしら？」

桃色の髪の少女がソーガの事を見つめていると、ソーガは桃色の少女の所へ近づいた。

「アミタと似た武器使ってるみたいだけじ、アミタの関係者?」

「お姉ちゃん知ってるんだーあと、私に何か用?私、今、あそここの王様にちょっと交渉しようと思つてるんだから邪魔しないでくれない」

「何か嫌な感じがするし、はやてせんとリインフォースさん。とりあえずこの人は俺が抑えておくから、王様のことよろしく」

「え、あつ、はい」

「あの方、一体……それにマテリアルが言つていた星使いといつのは……まさか……あの魔法の使い手……」

リインフォースがソーガが使う魔法について何かに気がつくのであつた。一方ソーガはとつと、

「とりあえず、色々と話聞かせてもらつから、俺がここに来た理由について、」

「ああんもう、折角王様と出会えたのに……邪魔しないでよ。」

少女はソーガに銃を構えた。

「エルトリア・ギアーズ・キリエ・フローリアン。行かせてもらいます!」

「十一宮魔法・ソーガ・ベルリツ。十一の星を使い、話を聞かせてもらひ」

ソーガ03 王様復活（後書き）

次回はソーガ vs キリエとなります。次回で序盤の話は終わりになります。

ソーガ04 一人の時の操者（前書き）

今回の話で本編のSEQUENCE1が終わります。という訳で、ソーガ vs キリエから始まります。

ソーガ④ 二人の時の操者

謎の少女、キリエ。そして復活したマテリアルの王ティアーチュ。はやてトリインフォースの二人はティアーチュと対峙し、王の復活を感知したソーガはキリエと対峙していた。

「まったく、私は忙しいのよ。だから、ナンパはお断りよん」

「別にナンパしているつもりはないけど…………アンタがあの王様を使つて何するつもりか気になつたからさ。もしも人に迷惑かかるようなら…………止めさせてもらひうー！」

ソーガは双児宮ツインを召喚し、キリエに斬りかかった。

「おつと、面白い魔法だね。それってもしかして失われた魔法？」

「よく知ってるなー！」

「博士の研究データからそういうものがあるって聞いてたからね。もしかしたら、エルトリアを救うために使えるかもしれないって思つたんだけど…………その魔法もらつていい？」

キリエはソーガの攻撃を同じ双剣で受け止め、弾いた。

「それ、さつき銃だつたよな！？」

「ヴァリアント・ザッパー。三つのモードに切り替えられるハカセが作ってくれた武器だよん。というわけで……」

キリエは瞬時に双剣から双銃にモードを切り替え、ソーガにゼロ距離で放つた。

「ハッピィ ドーリガーナー！」

六発もの光弾がソーガに襲いかかるが、キリエは少し驚いていた。

「あれ？ 直撃したはずなんだけど…………」

「悪いけど、白羊宮のウルを発動させてもうつたぜー！」

ソーガの体に白い光が輝いていた。それを見たキリエは……

「防御魔法？ でも、いつの間に……もしかして……」

「お前と戦う前に発動させてたんだよ。まあ、本当は王様辺りの攻撃を防ぐつと思つてたんだけど…………」

「へえ、すごいね。王様の使う魔法のこと知ってるんだ。もしかして王様が以前復活した時にいたのかな？」

「いいや、俺の場合はこの世界の未来じゃなくって、似た世界の未来で一度戦つたことがあるからなー！」

「似た世界？ もしかして、私とお姉ちゃんがこっちに来たことで平行世界に影響出ちゃったのかな？ でもいつかー！」

キリエは笑顔でそんな事を言つた。それを聞いたソーガはため息を付いた。

「何かやりにくい相手だな。でも、お陰で時間稼ぎはできたー！」

「へっー！？」

ソーガが笑みを浮かべた瞬間、はやて達がいる方からティアーチュの悲鳴が聞こえた。

「ぬあああああー！」

「し、しまったー！？もしかして、私のこと止めしていたのー！？」

「まともにやつあつ理由はないからね。」

ソーガはそのままはやて達の方へと向かうのであった。キリエもその後を追う

「平気や！王様、また悪い」としとるみたいやし、一回無力化させて話しかせてもらひうで、」

はやてがそう言いながら、杖を振り上げた。キリエは王様を倒そうとするはやてを止めに入ろうとしたが、ソーガが前に立ちふさがった。

「悪いけど、お前にも話しかせてもらひからな」

「邪魔しないでよーせつかく見つけたエルトリアを救う手立てを消させない！」

キリエが叫びながらソーガに向かつて行こうとした瞬間、

「ちょっと待つたッツッ！－！」

「きやあ！」

突然水色の閃光がはやてに襲いかかった。はやてはギリギリでそれを避けると、王様がいた場所を見た。そこには……

「王様！大丈夫？この僕が来たからにはもう大丈夫だから！」

「お久しぶりです王」

「おお、シユテルにレビ…………ん？なんじゃシユテル？上手く復活できているのか？新たに分身でも覚えたのか？」

ディアーチュがシユテルの隣にいるシユテルを少し大きくしたシユ

テルがいた。

「いいえ、彼女は私の分身ではなく、」

「シユテルんのお姉ちゃんだよー！」

「違います。この世界では初めてになります。私はスターライト。この世界とは異なる世界からきたマテリアルです。とはいっても元になりますが……」

「むっ、確かに我らと違つてぬしは人間っぽいぞ！まあよい！ととりあえずシユテルの姉ということにしてやるー！」

「姉ではないのですが…………」

スターが突つ込みを入れると、ソーガはスターの姿を見て驚いていた。

「スター、お前もこっちに来てたのか？」

「ええ、とはいって、どうやら貴方は今、私が知っているソーガではないみたいですね。未来のソーガですね」

「俺からしたら過去のスターになるのか。それで、何でお前は王様と一緒にいるんだ？」

「秘密です。」

スターが悲しそうな顔をしてそつまつと、ディアーチェが……

「ふつはははははははー・マテリアルが揃い、もうははシユテルの姉まで来た！小鳩！勝てるものなら勝つてみろー。」

「ディアーチュが機嫌良さそうに立つと、もうここももう一人の来訪者がやつてきた。

「見つけた！キリエー！」

「げつ、お姉ちゃん」

そこにやつてきたのはアミタだった。キリエはアミタが元気そうにしている姿を見て、驚いていた。

「どうして、毒はどうしたの？」

「あんなものー・氣合と根性でどうにかしましたー！」

「いや、俺が治してやつたんだからな」

「あれ？ 毒を治してくれた人。君のお陰でいつして……」

アミタが自分の体は調子がいいという感じに体を動かしていると、ソーガの隣に天蠍宮のスコルが出てきた。

『マスター、いい忘れてましたが……』

「何だ？スコル」

『彼女の毒は一応抑えていますが……解毒したわけではないので……』

……』

「はう」

スコルがそう言つた瞬間、アミタは倒れかけていた。

「「毒が消えてないから倒れた！！」」

ソーガとキリエが同時に突つ込みを入れるのであつた。アミタは言うと……

「だ、大丈夫。こ、この程度！」

アミタは何か立ち上がり、キリエを捕まえようとした。だが、

「残念だけど、この子にはびいぢやらぢつてもひうことがあるのであるのよ」

突然アミタが誰かによつて吹き飛ばされた。ソーガやはやて達が吹き飛ばした人物を見るとそこには着物を着た少女が扇子で仰ぎながら立つていた。

「こんばんわ。未来からの来訪者さん。そして、マテリアルさん達。と、一人は元だつて。そして、また会つたわね。十一富使いさん」

少女がソーガに向けて笑みを浮かべた瞬間、そこにいたソーガとはやては思い出したのだった。

「お前はあの時の…………」

「そや、うちらに変なもの撃ち込んだ人や。それにそつちのお兄さんも会つたことある！」

はやてがソーガの事を思い出しそうなことを思い出した。すると少女は……

「今日は私があなた達と会つたことは思い出させてあげたわ。だけど、他は思い出させてあげない。時がめりやくせになっちゃうんだもん！」

「お前は……一体」

「前も自己紹介したでしょ、私はこの世界の未来から来た者。名はフーレよ。そして貴方と同じロストマジックを扱うもの……」

フーレは笑顔でいうが、その笑顔は決して友好的だとソーガは思つことはなかつた。すると、マテリアル達は……

「ええい！ セつきから乱入して来あつて！ シュテル、レヴィ、スター、早い所碎け得ぬ闇を探すぞ！」

「待ちなさい。王様。碎け得ぬ闇については私といつちの桃色の子が何とかできるわ。」

フーレはそう言いながら、キリエの手を掴んだ。

「なんで、そんな事知つてるの？」

「私に知らないことはないのよ。ねえ、キリエさん。」

「ま、まあ、元々王様と協力しようと思つてたし、まあいいか」

「ふぬ、砕け得ぬ闇を復活できるとこうのなら、一緒に来いー！」

マテリアル達とキリエ、フーレはそのまま姿を消すのであった。アミタもそれを追うのであった。残されたソーガとはやて、リインフォースは……

「マテリアル復活に未来からの来訪者……こりゃ、闇の欠片事件より偉いことになるやな。リインフォース」

「ええ、それより、そちらの少年は……」

「そや、えつと、ソーガさんやつたつけっうちらがどうひりて知り合つたかは思いだへんけど、マテリアル達を追うの手伝ってくれませんか？」

「別にいいけど、一応ちょっとした犯罪者になりかけてるんだけど俺、それでもいいの？」

「今回の事件は未来から來た人も多そつやし、それにあのフーレっていう人はソーガさんのこと狙つておるみたいやし、あのシユテルのお姉ちゃんも関係者やし、ソーガさん的にはおとなしくすること出来へんやろ」

「まあ、そうだね。とりあえず協力するよ。はやて

「よひしくな。ソーガさん

こつして、時と運命、そして交わった世界の物語は動き出すのであつた。

ソーガ04 一人の時の操者（後書き）

次回からはSEQUENCE2に入ります？多分ヴィヴィオたちを出すと思います。

ヴィヴィオ02 時と次元を超えた出会い（前書き）

今回はヴィヴィオSIDEとなります。とはいっても、最初はソーガとなのはたちの会話となります。

ヴィヴィオ02 時と次元を超えた出会い

マテリアル達の復活で、なのは、フェイト、はやて、ユーノ、アルフ、リインフォース。そしてソーガの7人はどうするか話し合っていた。

「マテリアル復活に、異世界から来た人たち、それにソーガの世界から来たマテリアル」

「まったく、何でまたそんな面倒臭い状況になつてるとかねえ」

フェイトとアルフの二人がそう話していると、ソーガは

「俺やスターだって、好き好んでこっちに来たわけじゃないし、それに一応言つておくけど、今回の事件については俺がいた世界では起きてないからどういう結果で終わるとかまでは知らないから……」

ソーガがいた世界では学園都市でマテリアル達が現れたが、スターが闇統べる王からある力を抜き取り、あちら側のなのは達によつてマテリアル達は倒された。そしてさらに、1~3年後にマテリアル達が再び復活するがソーガとAINHART、二人が協力しマテリアルたちの力は今はスターが受け継いでいるのだった。

(そのこと話しておきたいけど、さすがにこの世界の未来とかに影響でそだからな……)

ソーガはそう思つてゐると、はやてがあることを提案した。

「とりあえず、三手に分かれよ」

「じゃ、私とユーノ君は赤髪の人を」

「私とアルフは桃色の人を」

「私とリインはマテリアル達を……ソーガさんは?」

「俺か? そうだな……スターのやつに色々と聞きたいことがあるからはやて達と一緒にほうがいいな」

「うして7人は三手に分かれて捜索をするのであつたが……その前にソーガはある事を提案した。

「と、その前に、もしかしたら俺の知り合いに会うかもしれないから……」

ソーガはそう言いながら一いつの魔方陣を開き、そこから二人の人物が現れた。

「マスター何か御用?」

「お呼びでしょうか? マスター」

魔方陣から出てきたのは宝瓶宮のベルと白羊宮のウルの一人であった。

「一人とも、悪いけど、暫くの間、なのは達と一緒に行動してもらつていいか?」

「私は別にいいよ~」

「マスターの命であれば……」

一人はソーガの命令を素直に受けたのであった。するとソーガの召喚魔法を見たなのは達は……

「すうじい。それって召喚魔法?」

「それもいとも簡単に……」

「これってソーガさんが言つてた十一宮魔法?」

「せう、召喚してさらに、武器として形態を変えられる。ちなみにここの呼び方は体じゃなくって人だからな。」

ソーガはそう言いながら、二人の十二宮を紹介していた。それを見ていたリインフォースは……

(まさか、あの扱いづらい魔法をいとも簡単に扱えるなんて……
ベルカ戦乱時彼らを扱えたのは聖王のオリヴィエだけと聞いたはず
だが……彼はどれほどの修練を積み、そしてどれほどの思いで扱
えるようになつたのか興味深い)

リインフォースはそう思ひながらソーガを見つめるのであった。

そして一行は三手に分かれて行動するのであった。ソーガが召喚したベルとウルは……ベルはなのはたちの所へ、ウルはフェイト達と一緒にいくのであった。

そして時間が過ぎ、海鳴市の夜の空、そこに新たな来訪者が……

「あわわ、クリス。浮遊制御！私とアインハルトさんの落下防止

「ティオもクリスの手伝いを……」

『ここやー』

ヴィヴィオとアインハルトの二人は何とか下に落ちずに空へ何とか

飛んで落下を逃れていた。

「ハルトはどうでしょ、私達は一緒に練習していく」

「はい、突然おかしな空間にのみこまれて……確かにスターさんも一緒にいたはずじゃ……」

「はい、それに何故か少しだけ記憶がなくなっているような……」

「アインハルトさんもですか？私もなんだか記憶が少しない感じがして……ソーガくんと会ったような気がしたんだけど……」

二人はとりあえずどこか降りれる場所を探そうと話している中、二人の姿を見つめる男がいた。

「たくつ、来訪者の監視つて言わされて来てみれば……あれって、ちょっと成長してるけど、ヴィヴィオじやねえか。もう一人は誰だか分からねえが……さて、ちょっとくらうつけかいでも出してみるかね」

男はそういうながらデバイスを起動させた。そのデバイスは白い鎌。

「じゃあ、少し相手でもしてみますかー！」

男はヴィヴィオたちに接近するのであった。

一方ヴィヴィオ達は……

「どうしたのクリス？」

クリスが突然何かを感じていた。するとアインハルトの愛機ティオも感知していた。

「どうやら誰かが接近してくるみたいですね。ヴィヴィオさんはここは」

「はい！セイクリッドハート」

「アステイオン！」

「「セットアップ！-！」」

二人は同時にセットアップをし、いわゆる大人モードへ姿を変え、そして接近してくる敵がやつてきた。

「どうも、お嬢さん方！俺はエクス・ハルート！ちょっとおたくらにちょっとかい出しに来たぜ！」

「この人、だれ？」

「管理局の人ではなさそうですね。ヴィヴィオさん、気をつけて……」

アインハルトがエクスに注意をすると、エクスは……

「なんだよお嬢ちゃん。いきなり警戒なんかしやがって……別に
さつきのは『冗談で……』

「普通ならそう思いたいですが……貴方の体の中から感じます。ソ
ーガさんと同じロストマジックの力を……」

「へえ、お嬢ちゃん。あの失われたロストマジックの使い手と知り
合いか。まあ、今はそんな事は関係ない。悪いけど、こっちもボス
の命令だからな。少しだけ攻撃させてもらひづぜー！」

エクスはハルクリッドを構えて言つのであった。

ヴィヴィオ02 時と次元を超えた出会い（後書き）

次回はヴィヴィオ&アインハルト vs エクスの戦いとなります

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4065y/>

魔法少女リリカルなのはGOD or LVF

2011年12月27日20時56分発行